



CONVOCATION DAY

SPRING

新入生交流事業

› 2018.4.14 SAT
› 大和キャンパス



公立大学法人
宮城大学
MIYAGI UNIVERSITY

コンボケーションデイとは

コンボケーションデイは、学生同士のコミュニケーションをテーマとした交流企画です。今年度は、パラスポーツであるブラインドサッカーを通じて、仲間を思いやり支え合うことや、声掛けによるコミュニケーションの重要性を体験するプログラムを実施しました。

テーマ
他者との交流・他者理解

パラリンピック競技のブラインドサッカー。2020年、宮城県は「サッカー開催地」です。

『ブラインドサッカー』は、視覚に障害を持った選手がプレーできるように考案されたサッカーです。音が出るボールを使用し、「フィールドプレイヤー」は全員がアイマスクを着用します。また、アイマスクを着用しない「ゴールキーパー」と「ガイド」が、ピッチ内の情報やゴールの位置などを「声」で選手に伝えます。ボールの音と、仲間どうしの声掛けによるチームプレーが大切な要素となる競技です。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックで、宮城県はサッカーの開催地になっています。多くの学生がパラリンピックの応援やボランティアに参加し地域を盛り上げるきっかけになると期待します。

2018年度 コンボケーションデイ<春>の実施概要

仙台を拠点に活動するクラブチーム『コルジャ仙台』をはじめ、全国から集まってきたブラインドサッカー関係者の方々の全面的なご協力を得て、在学生スタッフ・教職員スタッフが企画・運営を担当し実施しました。

◇実施日時/平成30年4月14日(土) 9:30~
◇開催場所/宮城大学大和キャンパス
◇参加新入生390名(看護学群:90名、事業構想学群:188名、食産業学群:112名)
6グループ(72~73名程度×6)に分かれ、グループごとに6か所の体験コーナーを回るスタイルで展開。



2018年度 コンボケーションデイ<春>のプログラム内容

A

実技披露とPK

体育館



B

ボールを使ったレクリエーション

体育館



C

アイマスクを着用したレクリエーション

体育館



全員アイマスクを着けてグループを作る、コミュニケーションを深める企画。血液型や誕生日などのグループを、アイマスクをつけた状態で互いに相手を探しながら、形成していきます。大きな声で呼び合ったり、手探りで確認し合うなどコミュニケーションを深めました。

D

歩行訓練

1・2階渡り廊下

渡り廊下等を使って、白杖を持ったアイマスク着用者と歩行介助役の晴眼者でペアを組み、交互に歩行訓練を行う企画。アイマスク着用者は歩行介助役のガイドで、障害物を避けながら歩行します。視覚以外の感覚で歩く大変さや、相手を思いやるガイドの仕方を学びました。



E₁

座学① ブラインドサッカーについて

2F大講義室

主に視覚障害者と競技の特性について聴講し、理解を深めるレクチャー。日本障がい者サッカー連盟(JIFF)について、また視覚障がい者と晴眼者が協力して行うブラインドサッカーについて学習。パラリンピックでの選手の素晴らしいプレーには感嘆の声があがりました。



E₂

座学② 障害者スポーツとの共生

2F大講義室

選手の職場の経営者をお招きして、障害者と仕事や社会との関わりをどう形成しているか、ケーススタディーを交えコミュニケーションの大さなどを学習。「放課後等デイサービス」に取り組む、地元企業・仙台中央タクシー『みらい宮城野』の貴重なお話を伺いました。



INTERVIEW

ブラインドサッカーエンターテイメントを通じて感じたこと

看護学群	<ul style="list-style-type: none">右も左もわからなくなり怖かったアイマスクをして、グループを作るのが楽しかった
事業構想学群	<ul style="list-style-type: none">白杖を持ち一人で街を歩いている人は怖いだろうと感じた。困っている時は声をかけたいガイドは思いやりが大切だと思う
食産業学群	<ul style="list-style-type: none">方向感覚がなくなり、視覚の大切さを知ったブラインドサッカーエンターテイメントが面白かった。川村選手のシュートに感動した

キャンパスの垣根を超えた交流

看護学群	<ul style="list-style-type: none">初めて会う人とも自然に話ができるよかったです他の学群にも友達ができるよかったです
事業構想学群	<ul style="list-style-type: none">チームやペアで、いろんな人と交流ができるよかったです今日は声を出していっぱい笑った
食産業学群	<ul style="list-style-type: none">大和キャンパスに来るのは入試以来、キレイで広いなど改めて感じた。新鮮で楽しかった初めてのことばかりで面白かった。他の学群の人とも話せて嬉しかった

GUEST講話

信頼関係が大切、サポートしてくれる「声」を信じて。

今回、皆さんのが多かったのは、“動くのが怖かった、難しかった”というものです。晴眼者は、8割程度、視覚の情報を頼りに行動すると言われます。ブラインドサッカーは視覚以外の情報、残りの2割を頼りに動かなくてはならない、そこに怖さや難しさを感じたことでしょう。

最も重要なのは、人の「声」を頼って競技するところです。仲間の「声」を信じて行動することができるか、それはお互いの信頼関係がなければ難しいことです。今回のような視覚を閉じる体験によって、新しく何かに気付く・感じてもらう機会になれば嬉しいですね。2020年のパラリンピックに向けて、またブラインドサッカーに触れる機会があったら、ぜひ参加してください。



ブラインドサッカー 日本代表
高田 敏志 監督

つまずいても、そこから学んで前に進んでほしい。

私は、5歳でぶどう膜炎を発症、徐々に視力が落ち、20歳を過ぎて全盲と診断されました。小学生の頃からサッカーが好きでしたが、中学では視力が原因でサッカー部に入れず断念、本当に悔しかったです。サッカーを諦めきれないまま、中学・高校は陸上部へ。その後、鍼灸師になるため筑波技術大学に進学し、ブラインドサッカーに出会いました。この時、“こんな競技があるんだ!”と衝撃を受け感動したのを今も覚えています。家族や友人など多くの方々の支えや助けがあって選手になった今、私は、“健常者だったらここまで出来ていなかった”と思っています。つまずくことがマイナスなんだろうか、とも。つまずくことから学びがあります。みなさんも、つまずいても決してあきらめず、全力で前に向かって進んでほしいです。



ブラインドサッカー
日本代表キャプテン
川村 恼 選手